

野々市市本町

旧北国街道

てくてく
マップ

2018年版

【制作・著作】野々市市観光物産協会

野々市市三納1-1

TEL 076-227-6160 FAX 076-227-6254

【監修】ボランティアガイドののいち里まち倶楽部

【イラスト】帆苅 宏典



菅原道真と布水

菅原道真は、39歳の若さで加賀の国の権守に任ぜられました。任期中に神にのり移り、流れる木呂川を眺めてその風光を「布水」と詠んだと伝わっています。木呂川は別名布水川と呼ばれていました。後に、国府を野々市に移した富樫家国が「野市」「野の市」と改めたようです。

北国街道と野々市

江戸時代の北国街道は、五街道に次いで重要な街道でした。加賀藩では、金沢城下から京都へ向かうときの最初の宿駅として野々市を整え、荷物を運ぶための人や馬をいつも準備させていました。京都方面へ向かう旅人を野々市で見送りしたり、金沢城下へ入る前に野々市で着物を着替えたりしたという話も伝わっています。

樫田富嶽堂 最中勸進帳

歌舞伎「勸進帳」にちなんだ最中。樫田家は、富樫家の末裔。先祖富樫氏が義経・弁慶を助けた徳を表し、最中の形は巻物に。難関突破の縁起ものとして親しまれています。

道路元標

1873(明治6)年、各府県所在地の街道要所に起点元標を置くこととなり、その起点を基準に各町村の距離が測定されました。本町児童館前にある道路元標は旧野々市村のもので、1920(大正9)年当時の役場があったこの地に立てられたものです。石川県の測定起点は金沢市橋場町交差点付近です。



富樫館跡石碑

1967(昭和42)年に金沢工業大学と富樫卿奉賛会が、館の存在を知らせるために、北陸鉄道石川線工大前駅の隣に建立。1994(平成6)年の発掘調査で、この場所から約500m南の場所に室町時代の館があったことが明らかになりました。

いそや菓子舗 野々市椿まんじゅう

野々市市の市花木である椿をかたどったまんじゅう。材料に加賀つくねいもを使用しています。

田村家



水毛生家住宅



館家



山口家



瀬尾家



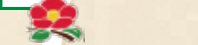
郷土資料館



喜多家住宅



8 布市神社



9 照台寺



2



1 旧六日通標



7 旧一日通標



3



4



5



6



1



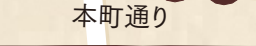
郷土資料館



旧北国街道 本町通り



旧北国街道



旧北国街道



旧北国街道



旧北国街道



旧北国街道



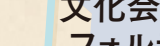
旧北国街道



旧北国街道



旧北国街道



旧北国街道



野々市の沿革

野々市(野市)の名がはじめて登場するのは、11世紀からです。室町時代の約150年間、加賀国守護富樫氏の館が置かれ、加賀の政治・経済の中心地として栄えました。富樫氏は、加賀一向一揆との戦いに敗れ衰退。一向一揆の金沢御堂の創建により、加賀の中心は金沢に移りました。その後、一向一揆と織田信長軍との壮絶な戦いで、野々市は焼けつくされたことが伝わっています。江戸時代は、金沢城下から上方へ向かう最初の宿駅、近郊農業地帯として発展しました。明治後半から大正にかけては、松金馬車鉄道や石川電気鉄道が開通し、交通と周辺地域の経済の要地となりました。



1 郷土資料館〔市指定文化財〕

(旧魚住家住宅)



1850年頃(安政年間)村井村字樋爪(現白山市)に建てられた農村の商家で、明治前半頃に野々市村西通(現本町4丁目)の魚住家に移築されました。こんかにしんや肥料などを売る雑貨店として1973(昭和48)年まで使われていましたが、その後白山町に移築され、現在は本町3丁目に野々市市郷土資料館として利用されています。この建物は、切妻となる主屋の表構えを町家型にしてミセノマをもっており、これから奥は農家の典型である田の字形の間取りとする独特な複合構造になっています。このような農家風町屋の型式は、金沢から離れた農村部の街道筋によく見られたもので、昔の面影をよく残しています。

住所 野々市市本町3-19-24
電話番号 076-246-2672
開館時間 10:00~18:00
休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、祝日の翌日(土・日は除く) 年末年始
入館料 無料



郷土資料館内「六日町かふえ」
土・日曜日 10:00~16:00

2 喜多家住宅〔国指定重要文化財〕



喜多家は、もと高崎姓を名乗った福井藩の武士で、1686(貞享3)年に禄を離れ、ここ野々市に居住することになりました。代々油屋治兵衛としてその名が知られ、幕末からは酒造りを営みました。1891(明治24)年におきた野々市の大火で、建物は一部を残すすべて焼失してしまいました。現在の主屋は、金沢市材木町の醤油屋の建物を買い求めて移築したものです。住宅は間口7間半、奥行き7間、2階建ての大きな町屋です。正面の細い縦格子の木むしこや「さがり」といわれる小庇の板壁、2階の両脇にみられる袖壁、そして内部の土間の吹き抜けに縦横に架けられた梁組など典型的な加賀の町屋形式を示しています。

住所 野々市市本町3-8-11
電話番号 076-248-1131
開館時間 9:00~16:00
休館日 不定休
入館料 大人400円 子供200円



3 水毛生家住宅〔市指定文化財〕



水毛生家は、間取りは町家ですが、表構えは切妻妻入の農家型の北加賀地方の町家としてはきわめて貴重な住宅で、主屋、茶室、庭、土蔵が一体となった見事な旧家の空間を構成しています。表構えとミセノマの主構造は江戸時代末期以前の形で、野々市の家々が町家化していった初期のものと思われます。茶の間より後方の主屋は、明治前期に建替えられたもので茶室の可夕亭をはじめとして、京風に洗練された味わいの数奇屋造りとなっています。さらに東に突き出した8畳の茶室は、大正初期に増築されたもので、自由な趣向の書院風茶室です。厚い苔に覆われた庭園は厚重な趣があり、茶室、座敷、可夕亭からの庭の風景は格別のものがあります。



4 館家



昭和戦前期まで宿屋をしていました。表間口七間に大きな入母屋屋根をかけており、一階にも入母屋玄関ポーチを付けています。宿屋だけに一階にも二階にも

たくさんの部屋があり部屋札が今も残っています。一見、通り土間があるように見えますが、外側に面した土縁で、便所や風呂への通路でした。庭も宿屋にふさわしい京風で落ち着いた雰囲気町の家です。

5 山口家

安政年間の1850年頃に建てられたと思われます。表構えは、二階の背が低く太い格子、一階は粗い格子で完全に低町家型ですが、平入りの部分はミセノマだけで、奥は妻入の典型的な前平奥妻型の家です。間取りは平行仏壇ですが、通り土間はなく、農家型の趣です。大工をしていた時代もあったようで、囲炉裏の枠は「黒椿」を使っているほか、自在鉤の細工が凝っています。



6 瀬尾家

明治になって古い家を購入し、明治20年頃表だけを改造しました。奥には馬小屋と納屋がありましたが壊したそうです。1891(明治24)年の野々市の大火ではイチョウの木で延焼をまぬがれました。表構えは土蔵に脇門まで付いており、完全な低町家型です。細やかな格子や木棧など、極めて繊細で上質な仕上げ。町家型はミセノマだけで、奥は妻入、間取りも前土間、正面仏壇の全くの農家型です。野々市の民家の特徴である前平奥妻型の代表的な家といえます。



7 田村家(旧藤村家)

明治天皇御小休所

明治天皇は1872(明治5)年から全国を巡幸しました。1878(明治11)年には北陸・東海を巡幸し、10月5日の朝には、乗馬116頭、総勢798人を従え、金沢の南町の中屋彦十郎宅を出発し、野々市の藤村家で小休止されました。旧北国街道に面した門と土塀は当時のまま残っています。



8 布市神社

住吉の宮は現在の布市神社にあたります。もとは富樫郷住吉神社と呼ばれ、旧一日市通・中通・六日通(一日市町・中町・六日町の現本町2・3丁目)の鎮守でした。富樫家国が野々市に館を構えたとき、敷地内に社殿を造営したと伝えられます。



1914(大正3)年、西町・現本町4丁目の鎮守であった照日八幡神社と荒町・現本町1丁目の鎮守であった外守八幡神社を合祀して布市神社と改名しました。

雨乞い石(弁慶の力石)

布市神社境内の史跡

もとは照日八幡神社にありました。明治以前にひでりで水が不足したとき、この石を担いで町内を廻ると雨が降ったことから雨乞石の名がついたと言われていました。また、義経が奥州に向かう途中、家来の弁慶が富樫の館に立ち寄って、余興にこの石を軽々と扱い遠くに放り投げた伝説があり、市内には、この石が落ちたとされる「力石」の小字名が残っています。また、若い衆が「盤持ち」と呼ぶ力比べのとき担いだ力石とも考えられます。



聖護院道興歌碑

1486(文明18)年に、京都の聖護院の道興という僧が、野々市に立ちよった時に「風をくる一村雨に虹きてのゝ市人はたちもをやまず」と歌を詠みました。この歌は、「虹がかかっていた空に風が吹いて、にわか雨が降ってきて、野々市の人は忙しそうに仕事を続けてやめようとしな」という意味で、たくさんの人でにぎわう野々市のようなすが伝わってきます。



9 照台寺

はじめは天台宗の寺院として1225(嘉禄1)年に念和が創立し、1331(元弘元)年に本願寺結如の子の周覚が真宗に改宗したとされます。加賀における本願寺の一族による一家衆の代表的寺院で、山号は光聖山(こうしょうざん)といい真宗大谷派に属します。「虎猫の御書」と呼ばれる「顕尊上人消息」は市指定文化財。顕尊は、本願寺第11代顕如の弟にあたります。この書状は、本願寺が織田信長との戦いに敗れた後の16世紀末頃に書かれたものと考えられます。

